■人間文化セミナー

☆演題☆

タイポグラフィとグラフィックデザインについて

と　　き：2022年10月28日㈮ 16：30 ～ 18：30
場　　所：滋賀県立大学 A2-202　講義室
対　　象：学生・教職員
講　　師：白井敬尚氏（武蔵野美術大学教授）

白井敬尚先生は、私が武蔵野美術大学の視覚伝達デザイン学科の博士課程にいた時に指導を受けた恩師で、今度のセミナーのためにお招きし、「タイポグラフィとグラフィックデザインについて」と題してご講演いただきました。日本のグラフィックデザイナーであり、武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科の教授である白井先生は、タイポグラフィを中心としたブックデザインやエディトリアルデザインに従事し、世界中で高く評価されているデザイン誌『アイデア』（誠文堂新光社）のアートディレクションの仕事で、多様なテーマのデザインを2005年から10年間にわたり手がけました。また白井先生は、グリッドシステムの創始者であるヨゼフ・ミューラー＝ブロックマン（Josef Müller-Brockmann）の『Grid systems in graphic design』の日本語版監修し、日本人が分かりやすいグリッドシステムをデザインしました。

視覚伝達デザインとは、視覚言語でメッセージを作成・伝達し、読み手の態度や行動に影響を及ぼすデザイン領域です。また、大衆とのコミュニケーション効果を極大化する為、視覚的な実験と造形的な探求を要求します。視覚伝達デザイナー、グラフィックデザイナーは、物事から感じるイメージと情報をより簡単に伝える為、視覚的に表現できる努力が求められます。その中で最も基本となることは、編集デザインとタイポグラフィです。そして、デザインの基本である調和とバランスの取れた構図を作るためには、グリッドシステム（Grid System）が必要です。1970年代から本格的に使用されたグリッドシステムは、デザインのレイアウトにルールを付ける手段として、要素を合理的で簡単に構成するフレームワークです。グリッドの役割は、単に地面を分割して配置を容易にすることではありません。伝達するメッセージに合わせてグリッドを構成してからこそ、適切な構成で内容の伝達がより容易になります。それ故に、グリッドを使用するには、主題とテキスト内容の総合的な理解力が要求されます。伝えようとする情報に合わせて書体・写真・図形を選んでから構成する編集デザインは、グリッドを通して情報を正確に強調することで、説得力のあるデザインになります。

白井先生はセミナーで雑誌のグリッド、それぞれ異なるテーマやテーマの書籍のグリッドなど、白井先生の手により造形されたエディトリアルデザインについて説明していただきました。また、同じ内容とメッセージでもより説得力を持たせるために、デザイナーはどのような努力をしなければならないか、どれほどの試行錯誤を経なければならないかについて話していただきました。また、グリッドシステムを適切に使い熟すためには、書籍の分野・性格・テーマ・内容はむろん、作家の個性や雰囲気など、あらゆる状況を考慮して作らなければならないことについても強調しました。

今回のセミナーでは、生活デザイン学科以外の学生も多く参加したことから、視覚伝達デザインに対する関心が高いことが確認できました。参加した学生たちからは、ブックデザインとタイポグラフィに対する興味が深まったという話を聞くことができ、講義を企画したやりがいを感じました。　（徐　慧）

☆演題☆

食品添加物の役割とその安全性

と　　き：2022年12月2日㈮ 16：30 ～ 18：00
場　　所：滋賀県立大学 A2-202
対　　象：学生・教職員
講　　師：川岸昇一（日本食品添加物協会・常務理事）

今年度の生活栄養学科主催の人間文化セミナーは，日本食品添加物協会の川岸先生をお呼びして「食品添加物の役割とその安全性」というタイトルでご講演いただいた．食品添加物の利用目的や役割についてご説明いただき，食品添加物の安全性の考え方を通して「食の安全とは」を改めて学び，一般消費者が持つ「食品添加物＝悪」のイメージと2022年３月に発出された「食品添加物の不使用表示に関するガイドライン」について説明していただきました．

川岸先生は食品添加物の製造メーカーで長年働いてこられた経験があり，講演だけでなく，特に時間外の質問への回答はとても分かりやすかったです．後日「食品添加物に使用されているリンの低減のための取り組みはやられているのか？」という質問を後日したところ，「無い」という回答と共に，理由として「安全性試験をパスしているから問題ない」こと，「代替となる物質が無い」ことを挙げられました．食品添加物は食品に添加されるものですが，メーカーの考え方に「栄養学的視点」が入っていないことを知ることができました．　（佐野光枝）

☆演題☆

同性愛者からカミングアウトされたら？ ～異性愛者の反応を心理学的な視点から考える～

と　　き：2022年12月5日㈪ 13：10 ～ 14：10
場　　所：滋賀県立大学交流センターホール
対　　象：学生・教職員および一般
講　　師：鈴木文子氏（公益社団法人国際経済労働研究所・研究員）

鈴木文子先生をお招きし、「同性愛者からカミングアウトされたら？」と題してご講演いただきました。鈴木先生のご専門は社会心理学で、研究分野は同性愛者など性的マイノリティに対する偏見や差別です。現職では、企業のダイバーシティに関する取り組みについても研究をされています。

2006年に議決されたモントリオール宣言を皮切りにLGBTという言葉が世界中で用いられはじめました。近年では、LGBTにQ（QueerやQuestioning）が加わったり、LGBTの代わりにSOGI（Sexual Orientation and Gender Identity: 性指向と性のアイデンティティ）という言葉が用いられることもあります。さらに、LGBTに対する認識が広まるとともに社会システムも少しずつ変化しつつあります。東京都（世田谷区、渋谷区）、北海道（札幌市）、茨城県、大阪府では同性カップルを結婚に相当する関係と認めるパートナーシップ制度が導入されました。また、制服を自由に選ぶことができる中学校や高校も増えてきました。このように、ジェンダーに対する認識はここ15 ～ 20年のうちに急激に変化し、多様な性を尊重する動きが起こっています。

しかし、その一方で、同性愛者に対する個々人の差別や偏見がなくなったかというと、残念ながら多くの課題を残しているのが現状です。なぜ、同性愛者に対して差別や排斥行動が起こってしまうのでしょうか。

ご講演では、まず、同性愛者に対する否定的な態度が生じるメカニズムについて、男性と女性がもつジェンダー自尊心（男性らしさ、女性らしさ）の観

点からご説明いただきました。現代の世の中からの方向づけによって男性らしさや女性らしさといった規範が個人に内在化されます。そして、内在化された性役割規範から逸脱しないよう、男性は男性らしさという規範から逸脱しているようにみえるゲイに対して距離をとろうとします。一方、女性は女性らしさという規範を遵守するため、マイノリティであるレズビアンに対して寛容な態度をとろうとします。つまり、性役割規範という一種のステレオタイプが同性愛者というマイノリティに対する差別を生み出す一方、マイノリティに対する寛容な態度も生み出すことを講演を通じてお伝えいただきました。加えて、同性愛者から恋愛感情を向けられた際に否定的な反応が生じてしまう心理的背景について社会的感染不安といった概念の観点からお話いただきました。

今回のご講演は、人間関係の科学Ｂ（人間学（全学共通）科目）の授業と兼ねて開催いたしました。本授業はコミュニケーションに焦点をあて、人間や社会のあり方を読み解いたり、新たな可能性を検討することを目的としているものです。今後もジェンダーをとりまく情勢は一層、変化することが予想されます。ご講演の内容について学生それぞれ受け取り方は様々でしたが、いずれの学生にとってもこれからの社会のあり方について再考する良い機会となったと思われます。（谷口友梨）